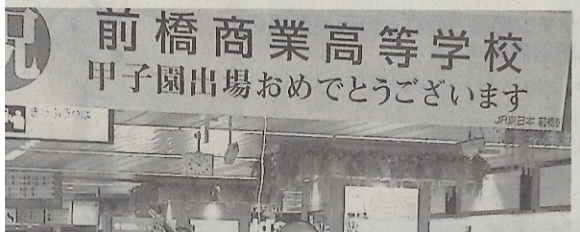
2023年8月2日 朝日新聞 掲載

石段街 ハワイの風

石段街で踊りを披露する参加者ら＝渋川市伊香保町

に始まり、今回で25回目。今年は新型コロナウイルス感染予防のための規制がなくなり、4年ぶりの通常開

甲子園へ出発「全力で楽しむ」



甲子園へ向かう前橋
JR前橋駅では多く
った＝1日、前橋市

館林紬 千年の歴史 紡ごう

館林市で織られてきた伝統の織物「館林紬（つむぎ）」の生産が途絶えかけ、消滅の危機にある。「千年の歴史を終わらせるわけにはいかない」と地元の女性らが立ち上がった。市内で館林紬を生産できる状況を取り戻したいという。

伝統再興へ会社設立

館林市内でホテルを経営する安楽岡紀子さん(47)と、同市出身でバングラデシュ発のアパレルブランドなどを手掛ける飯塚はる香さん(33)らが7月6日、合同会社「紬・組」を設立した。

2人は館林紬再興プロジェクトとして、まずは館林紬の特徴を表すしま模様のシンボルカラーを作った。ツツジの赤、ショウブの紫、麦の黄など同市の名勝や産業など特色ある色で構成し、中心に鶴を描いた。クチバシに糸をくわえている。商標登録を申請中だ。

館林紬のシンボルカラーと安楽岡紀子さん（右）、飯塚はる香さん＝館林市役所

特徴ある柄 身近な生活用品に

館林紬は木綿の普段使いの織物。鎌倉時代から続くとされ、しま模様と格子模様の特徴がある。江戸時代は江戸の市場で人気になり、館林は織物産地として栄えたという。だが、木綿の着物を着る人もいなくなり、現在、市内の織物業者は1軒だけになった。新たな館林紬は生産していないといい、産業が途絶えかねない状況だ。

そんななかで、安楽岡さんは「かつてはメインの産業だった。伝統を廃れさせてはいけない」と立ち上がった。飯塚さんは「館林紬を再定義し、まずは市内で織れる状況をつくっていきたい」という。

当面は、織物産地・桐生市の業者の協力を得て、生産する。館林紬の魅力を広く伝えるため、紬の柄を衣食住の様々な場面に落とし込む。Tシャツやスマホケース、ノートや文房具など様々な商品に取り入れ、館林紬をアピールしていく。

（柳沼広幸）